リ 5
112
4

門外不出

正德元年　辛卯　五月七日改元

正月廿日未刻芝土器町（なを数余町といふ）より出火西北風烈しく浦伝ひ新橋芝辺
青山海辺まで焼亡町屋とも不数焼死多し

○正月十九日牛込和泉町より出火乾風烈しく霊巌島に及ぶ
（麹町焼失と云又十町計り焼る）○正月廿五日円光大師五百年忌にあり　東漸大師の
遺号を賜ふ○二月江州土山田村孔雀像漂着して霊験
○二月下総沈の辺より出火西北風烈しく延焼万数に及ぶ（折焼宗不）
○三月十五日より五月まで播州総泉寺にて極楽光明寺尼
の七百廿二年忌として回向あり（本母寺縁記によれば七百卅五年なり）

同攻會印

○正月羽田要津流出院不動才天勧請 有る家ふ女一 当像ことしふ

○正月五日より六月廿日まで永代橋ふく房州清澄寺虎空

義井宗順 ○夏中より回向院ふて甲子八日市場不動尊開帳

この時ふ女橋東詰松屋三左衛門といふ者ふ女房ふて花屋ふして製し簡ふ手ふ

宗務ふ出ふみしといふる者の人の名れ[illegible]

ふくといへども つふまさるを長尾氏の弟先不

ぶて名付しと世の沙汰ふ侍不りえんとう

○七月下ふ[illegible]札所の野古寺大門口の高札を除る

○八月江ッ宝源通用をゞまる ○八月九日大風

○九月十八日落合村養雲寺然花寂 禄花の花逸普く人の

知る所ふて[illegible]ふ異ふ

○今年浜辺幸菴率 百三十才 大坂住 ○三陵稱荷社ふて今年より

祭送七夜行とい事を行ひ始む ふる江府神社異ふ

○十月朝鮮人来聘 正使翰養侯 副使任守幹 張書記李邦彦 藤宿見と

本誓寺ふ宿りしふ除川へ引るるもの今年より八東本願寺

と成る野井自不生平、宗旨異ふ中韓人の子を見るは自石朝鮮人ふと問答あり

第沙を翰養徳輯孫して江戸第潭とふ写本一冊あり 寛延年十一月五日在江戸

附自石源君英 新井氏 ふて 来訪 ○十一月廿八日親鸞上人二百五十ゑ忌法会

腰不とふ[illegible]

○十二月五日祐天上人塔上る住職ふ命せらる

○十二月十一日申刻連雀町より出火乾の風烈しく通町本銀町本

町石町江戸同まて焼ける 端まて一石橋日本橋焼落雲巖

寺まて焼接同日夜宮刻火落る 橋ふ江戸連雀丁 八次田町焼ふ

寛政二年 壬辰

正月八日伯州中邑留溪率 名顧言 称新八郎 紀ち町妙徳ちふ葬ふ

○正月十一日 一説ふ月二多 正月十四日ふ云 風和馬新 称師 深川寂 初ふ言林ちふ葬ふ

曹洞の智識あり

○日本橋江戸橋の石廣小路と成る ○二月自石生平紀毛人乃

旅宿ふいとりて同対の事あり

○二月八日浅草より本所同日まで焼亡本所に古救小屋建つ
○三月深川往還荷物改所において并菜漬と駿河にも同断に
お宋 ○七月廿四日水戸府儒師尾氏の室長山霄子卒 四十二才 号以文室
寺に葬る烈女にして文をよくす 年山紀聞に晴人物あり
○九月四日宝銭通用止
○通一丁目呉服店白木(しろき)の井に去歳銭を入置数月を経て今
年井白水を獲(え)たり来聘(らいへい)の韓人(かんじん)朴同知浮菽銘を撰今年十一月
赤井得水(とくすい)写して銅板に鐫(けい)る

正徳三年　癸巳　九月閏

正月廿七日狩野養朴常信卒 七十八才 称右近
○三月二挺立三挺立の船を禁せらる
○四月木挽町山村長太夫芝居にて助六の狂言始て興行あり

○四月晦日江戸中白き花降又舎利のやうなるもの降る
○五月二日儒師大高芝山卒 名季明 称清助 渋谷長谷寺に葬
○五月十九日の夜蚩尤雲(しゆうくも)現る戌時より子の刻に至る漸く消たり
しれ光あかるく見えたり光はまさりし東より西の方にひきてもあかく
見へし 深川にて見たり ○十二月廿二日下谷より出火下谷浅草辺焼亡
騒し ○今年深川三十三間堂焼亡同六年再建あり

同　四年　甲午

三月木挽町(こびき)六丁目山村長太夫芝居断絶(ざんぜつ) この時俳優生島新五郎八丈島に遠流せらるゝの後にて
絶ゆることなし雖も [illegible] 江戸芝居一番切の退転しといふ
[illegible] 人足多くあつまり大坂より来り
[illegible] 町にて山城屋といふ酒屋の下男 [illegible] 村
[illegible] 声色をつかひける [illegible]
[illegible] 声色をつかふものありしとぞ

○五月新金銀吹替○五月二日品川東海寺中宗源院修溪和尚寂（石谷院第六子長せり）○八月六日より十五日まで堀上る山内常照院本尊弘法大師○八月六日医師本下春林軒（元石の父源邦軒嘉穆と号）

○九月廿二日根津権現祭礼江戸町中々練物あり（廿一日あり雨天成し故今日小建とり）

今年ホそ〻まり一年ホ〻て止り書数五十番町数百五十四丁あり此時の番付曲亭漫筆にいる書ホ如くなれハこゝ小略し其の後節のこゝをあらハす

熱門とゝ茅町通西川家西隣神田橋外裏門通り昌平橋入神田橋外より護持院裏表より元飯田町田安御門を入竹橋を出門ありて町通りとゝ表より町也日本橋日市土手表より西藤而文とゝ日本橋浜り通り町筋遠橋とゝ上野表より石川家前茅町とゝ本社〻帰興あり〻とあん

○十一月琉球人来聘（正使与那城王子 令弟王子）

○十一月江戸銀を以て新上銀小吹あり

○十一月十一日夜光物辰巳とゝ成て光ゝ花の如く震動ス

正徳五年乙未

三月廿一日伯耆国深見訥亭卒（名直一名永常 弁達院定院小墓）

○三月廿七日遠州八十才にて尚齢命あり（ちゝ〻〻） 列侯の家 [illegible]（しゝ） 随翁（百八十七才）

小森閑翁（百三十六才） 古結宗見（百八才） 石谷宗芳（九十七才） 千家七兵衛（九十一才） 菓人谷江一雲（九十一才） 長谷川宗柏（八十二才）

○江戸日光山百年御祈願法会あり

○正徳とゝ家保とゝ〻まて中橋廣小路にて盆中夜小入而く

とゝ集り踊りををどる○十月十七日御人間和尚（八十余才西方寺小墓）

○十二月晦日夜半計り小路の辺とゝ少〻て光燈橋法門内

教学院門内まて中橋とゝ芝居橋までの町屋本挑灯小あり

翌三月元日夕〻とゝ諸火

此年間記事

角力取松風潟五郎能恵之釜淵大関となり正徳二年雖司谷
鬼子母神社の額を収む○能人窪女冥賀園山内に樹木二十六
株を栽る事仙播と号す

○深井樵木屋伊兵衛勢州鄭国を多く買入落ふ泥せる面白を
木もこれを庭木樵しあり享保の比なりし百種の机を集めを寄を接刻しまさ
地蔵樹長サ九株樹本年年花蔵絵巻の編集あり樹ふえりて世年行なる

○浮世絵師菱川師宣正徳中七十餘才にして絵を画り蔵製して
懐月堂号安芳孫係七 友竹と号す

○小丹町天王宮の時山門の造り物大根汚連望らさる事正徳中
より始り今ふるまるに小丹町天王の内張おむ〜小伯る町ふあり〜を正徳
中疫病行き〜時小伯る町の内張ふり作要を
小丹町〜うりて疫病をまぬかれり後〜事に長く小丹町ふうつ〜
うりて大人の口碑ふ残り又菱川氏ふ編の譚法ふ出ふるせり

○武江渡砂石小石川古殿係疫病流行永中和田倉御用
屋敷ふ於て大米氏仮居の時米穀吉田家の雑蔵掘り出る所川の
疫病流行を大米氏の能ふる事にして勅使を正徳中法用屋敷
一統引拂せ〜を白山出殿〜智地を下さる〜時稲荷社も白山
移〜けるに幸踏の事ありて伝仰の物ふけるに後こさ紀〜
引拂〜けるとあり

○管蘆ふ古来ありしと夢ふもとるを〜めい正徳の比築地
小芝原家乃乃真持神宮〜とり要祀り〜ふ安楊東寺山
本芝原家〜家見無ふて夢始ふ〜に世事沙汰ふいつり

享保元年 丙申 二月国 七月朔日改元

正月元日去年除夜の大火 今年ふ始る 烏帽子直垂の事と伝
沢ちふ入死を限雑を〜に 人家或ハ近隣ふ火のこ
けるに〜打焼家の他月ふつり 十一日又池の端ふり火発〜て神田辺本町

石町日本橋辺大火焼多く物会もやけくるゝ折柄
業の記ものに見えたり○同十八日深川吹上辺より出火して
本所深川多く焼亡す
○半蔵御門外橋詰門清水門内古来のこゝ通路を四ツ目ぬふ
○八月十五日俳人山口素堂卒　七十五才　浅草浄院に葬
○十一月廿九日夜光物飛ぶ○十二月廿七日儒師林下道円卒　名元亨号菊亭
麻布宗福寺に葬る○折樹業の記録　野井白雪編　写本

享保二年　丁酉

雅楽頭酒井忠挙　丁酉のゝ殺句
厩橋酒井忠挙　所や業乃書　正親町公通ノ
○二月廿二日来訪小石川辺の酒井田

護持院の荘厳祈願橋詰門内鍛冶橋内まで佛餐の薩郊数
宇通町八丁堀築地まで武家町屋も駿〻焼亡あり
○翌廿三日俳人北嶺厚世卒　四十八才
○翌廿三日護持院を小日向の寺に移さる○正月廿三日俳人小村捉亭卒　深川法禅寺
武家屋敷浦海畏地とあるまでの海辺雑木橋邸
小日向金剛寺に葬る　東護院に葬る
○六月鉄炮洲船松町より弱辺宮士橋限り花万度をさゝる事
今年より止まる○七月鉄炮洲古来止
○八月新金銀乾金通用止　三年限り　古例止
○八月十六日大風両家屋を損ず
○十二月十二日神田橋大工町より出火日本橋小舟町まで焼失
○同廿八日浅草より牛込山伏町より出火麹町紀尾井町芝田町まで

焼亡○十二月　日国中丘隅率　武州川崎の西小向村妙光寺の名僧なり冠者老人と云一年小向川の流れを治て功あり
後て法中の列ふかくあつかりしと

享保二年　戊戌　十月至

○二月十五日深川本誓寺なる異鈍地蔵を今日より出ありかして
出歳拝集り詣つゝの形ひをうるよりこれ江戸名所のうち
○二月廿二日備前国井黄陵率　名孝廻　称長左衛門　三輪左禅寺に葬る
○五月朔日五郎兵衛町より出火通町八丁堀辺築地まで焼亡
○五月十九日備前酒泉行郎率　名弘　称長定　僧逸院　中見樹院に葬る
○六月七日本堀侍従忠真抗出家智あり
○六月十八日御人井西亭改我率　六十七才　本郷に葬る

○七月十九日祐天上人月忌ふ家　八十二才　享保中二世祐海上人
遺跡に寺を建て祐天寺と号ふ
○八月廿六日備前三宅頼潤率　称九十郎　法名　流光院に葬る
○閏七月市村竹之丞延寿斎道世一本所ふ自浄院にて寺を
開創し城西と号し給へりける今年十月十日六十五才にて
大往生をとゝ　○十月廿日将軍探花の設率
○十月表御座六百人ふ定る○閏十月新令銀引習始る
○十月琉球人来聘　正使　越来王子　○十二月五日小石川白山社鄙焼
○後年七月旧家の僧庶人僧法院
僧正となり後年僧の名をゆるす

同　庚辰年　己亥

正月元日閏の月日　二ヶ年　○二月十二日本町三丁目弁天田焼亡四五

十日ゆゑありて溺く結ぶ○二月廿二日雷雨ありて五百羅漢堂焼

○三月十八日より五月廿八日まで流行する疫世号麻疹（寛永元年より世三年月あり）号赤疱瘡（林仁斎つ二十七才あり楊梅瘡は梅毒の義）

○江戸町火消いろは組ととのふ○五月流行する年堂供養十万人

様始る（月六年九月ホいろは流行）○流行病治療の祭礼天社今年第ホ羅り今の地へうつる○九月朝鮮人来聘（正使供奉中副使英諧従事李明彦等あり後者東武に死する　此時韓人曲ることを雪ることを思へて但疫中詩を綴せり此中の文集ホあり）○九月江戸韓人逗留の内に常町家宅焼亡（ほぼ年八丁堀辺鄙焼○十月新吉原町本屋又七と云ものの出川前の町人をうさらひ御殿山の上より江ホ擬せ之所を元ゆる（辰巳八幡宮辺歌ホ云同十八年より二百の号無行せ）ゆゑ流血あるて止む）○十二月九日御人夫狩桃隣寛（号五雲庵寛政七町狩光明寺ホ葬せ）

享保五年　庚子

二月廿五日浜町歌大お輝大変ち焼亡

○三月廿七日年号別流行町ところ南風烈しく毎り町目本橋

元伝馬町ゆ昏町ゆ神田辺和泉橋下谷上野坂本今行其の端

ゆゑ焼る○上野二ヶ門法速元

○七月廿二日信濃中野橋蒲寛（五十日オ名経義　原川寛清ゆ本葬）

○八月関東洪水○八月町火消の纏ゆ組の方幟を記しる

長七尺の吹流を中又捉を記しる異幟を副ゆ（此時代の纏ゆ吹流の長さ八尺限の編を並べ書ま）

纏ホ流ゆる流抱ハ此時代ゆ纏を長ゆ

○八月十八日信濃移国桜義寛（称　後年　金寛の男）○九月江戸大風

○九月廿一日白山権現ゆ神輿子町ところ新しく結ぶ（中絶）

○今年冬冷泉中納言為綱卿江戸へ向あり時為氏伝遍歌

○洞房院寺流写率（[illegible]）
○吉原九郎二冊流（[illegible]）

享保六年　辛丑　七月宝

四月八日益田時貞彼町より出火、西北大風通り二十間より京橋
京橋本町八丁堀本橋町鉄炮洲築地霊岸島銀町まで焼る
○二月二日辰下刻二河町四丁目裏町より出火して神田多下谷
上野仁王門焼落寺町二谷まで焼亡
○二月四日巳刻過より出火戸町より出火小日向小石川辺一帯に焼る
白山の辺より二筋に別れ日暮里に焼る此時通院へ逃入焼
死せる者二百八拾余人と云一基の塚を立て今に有り　築土八幡宮白山社も此時
焼る伝通院失火後殿堂伽藍再建あり

○同寺[illegible]出火消防安小川町へ引移る
○二月十五日金瞎立柳川政次率（柳川の祖なり）
○二月四日水府侯出行医吉田林斎率（八十七才[illegible]大樹[illegible]義子
[illegible]享保十年巳九月卒せり）
○二月十二日水府侯儒臣森尚謙率（号儼塾）
○四月浜社の祭礼の時屋敷と名つけさる物を作る中古伝来あり
○五月神田橋門外に於て吉林見宜醫者講演始る（法医師
[illegible]）
○六月十二日（一説七月）茶人懸宗紹率（号宗京子[illegible]
中村雲院[illegible]）
○書物問屋定る（六十軒）○六月二日傷寒肢節保庸率（[illegible]
[illegible]）
○七月廿一日亀町八丁目通より妻に十四才食物同率中痛舎利
をおこす[illegible]又一顆をおこす翌辛壬寅六月朝日黄昏
又一顆をおこす[illegible]小家[illegible]中の人皆泣く親王を

号法印泉涌寺塔頭来事を撰ませて舎利の記一篇をあらはせり
文集の中にあり ○秋霖東海道 ○十月金猿引習
○十月湯島三丁目浅草広小路の傍の六地蔵を六面
に建立せり 今橋場総泉寺にあるもこれなり ○十二月十日三河町より出火通町筋本
材木町坂本町南茅場町八丁堀鉄砲洲築地まで類焼
○十二月廿七日浅草氏十一代通称平兵衛 五十八才
○南蛮列志完成 ○南蛮列志完成とは古今を博く完なりまみいまぶ
の事あり享保六年の頃英金の舟漂流なりまでいまく年の
はつゝぬなりとて博く所ありぬ
○芝永井町冨町冨山町博上るの火除地となり 祝図碑を
なせる ○あづま鑑記刊行 貝原篤信 土佐正遠

享保七年 壬寅

二月十九日より八月十九日まで一ツ橋内の邸地に諸人遊賞を
ゆるされる事始る ○二月廿日より七日の乃渡茶屋観世音開帳
絡と成る ○三月十八日より七日の乃渡茶屋観世音開帳
○五月十九日備前中根桂叢寿 名重玄 称方内 本姓四院宗義氏
○六月市中多賀源四郎公論 公論 衍義をあたり 兒童のをなを書て
与へる 板木命せらる 六論衍義八室鳩巣先生の訳なる 伊勢町木 家康定
○七月江戸中某稲荷廻廿九人を定る 伊勢町木 今本建
○八月八日備前源見玄貞寿 七十七才本姓を改め称号を玄貞と書沢渡茶
親名を施世畏の翁を書し人あり之秘護函
院中 ○十月千川上水青山三田の上水を止る 安永九年の頃千川上水再成
茶屋を 九天保六年 ○十二月六日神田竹根町より火出て神田一帯小焼亡
より止む

○小石川法華堂不養生所建十二月より貧困の病者を宿めく
薬餌を与へ（ものゝ）（比所の板を潤割板ごとのひーろこまをり板と病人板と
いふ記を人情通院市住所の医師小川宥祐と云人なり）

享保八年　癸卯

二月十六日赤坂伝馬町より出火為出風列々に芝浦の久保迄焼る
武家方町屋類焼数〜　○二月十五日より三日の間中村勘三郎
芝居百年の興行云新狂言（ちんぶ）数（すうこ）猿若大名望を興行仕
○二月廿二日作〜本玄龍率　七十四才文山の兄弟也なり
博士号伊深運院小義也
○二月廿九日鄙人志村垂倫率　六十三才
○三月十九日板本人麿千年忌　二月朔日より貴賤参詣
四位侍従大明神と唱へ奉る
○元禄銀宝永銀中銀二ツ宝銀ハ今宝銀通用止
○五月十四日彩井明卿率　白石二男　祿位義濃守
故事を市立る迄も小義

○六月備前深井秋水率　八十二才
○七月廿六日沈上人門弟率　再建入佛供養　宝永年中焼亡の後
廿三世日沒上人再興
○八月近藤重蔵　○音羽町九丁目青柳町辺飛脚屋掛出の時隙
貴女あり〜　野と書りて野や　老羽のろろと出　○十月十日湯島天満宮造営迄文此時
より上　参詣
○十二月五日牛込より出火市谷門内横町辺焼亡
○十二月十日狩野洞春福信率

同九年　甲辰　正月宝

正月十二日英一蝶率　七十一才二年板義数を中張玉院小義仁辞世
まるくろく深世のうさの色とくも者てやまず小義墨の月
○正月廿九日小石川茗荷谷より出火東の木挽町まで焼る芝
口五門焼失して大の坂市再建ス　木挽町出火消
屋敷に出入る
○為久保八幡宮造営の時浅野造営古義造小義造

○甲府御城焼落る○二月日詳 本郷より出火築地迄焼亡

○六月七日將軍家斉公薨年 六十才

○六月廿五日東都毛除長サ数十尺ヲ限リ毎一色白くなるの尾の細きうこと〳〵○八月御蔵前札場百九人ヲ定る

○十一月廿一日御人二世の立志年 清系孫ヲ養子葬ル

○寛和通暦刊行 京中根元圭編

享保十年 乙巳

二月十日青山久保町より出火赤坂紀谷市谷牛込大塚高田小石川巣鴨駒込谷中ヲ焼合ハ焼亡

○二月五日五百羅漢再建出来

○閏十九日御人菊石亭秋色年 稚世見し花のさかりも色のうきつもる

○五月十九日官儒新井白石先生年 六十九才 名称 字君美 儒系殖産ヲ津ヲ徳ヲ葬

○六月廿二日吉宗六代ヲ育年 五十二才

○七月廿日深川猪殺一寸見河東死 紀十二才天性豪放ヲ所為ヲ不拘ヲ家務ヲ葬ル ヲ葬ル ヲ速ヲ碑ヲ十三日ヲ葬ル 雖之

○九月二日吉良義央死 大石蔵のふうこうのくるを良義大石のつゆと いひ深川黒江町ヲ居し蔵ヲ葬ル

○十月大判出来 智元孫大判出来 墨多又出来 智あり

○今年長崎の人志賀隨翁 百七十八才 小谷動吉ヲ 百十二才 伊藤市蔵ヲ 百十八才

石井効吉ヲ 百二才 沼田伴義 百一才 水野彦中ヲ 九十二才 桜田十郎ヲ 九十二才

下条長安ヲ 九十二才

同 十一年 丙午

二月七日御人せく玉栞風年 号桜屋架押ト 表芸ヲ葬ル

○閏廿日御人雲女年 六十二才利髪して紅渡ヲ 吳山蔵ヲ中会ヲ紅ヲ懐地ヲ葬ル

○二月廿九日傷寒にて把默翁卒　自親居士と号す　市谷長円寺に葬す

○今年五穀豊熟あり　○田向院にて荘系彩赤慧を天照山大吉寺

朝日如来深秘　○五月渡草小揚の理を講ず　元白人の老母不仕くて

奇特の事ありて褒賞をあたらる　時人侍者山　紀伊守あり

○六月廿日御人形間沾涼卒　六十二才号合歓堂　俳業盛に行はれし

○今年より十七年まで深川十万坪に疫病あり　文政元年五月ホも

同所にて流行あり

○十一月十八日大道寺友山翁尚歯会　志賀隨翁を座元人の

翁会はじまる云ふ　文政年中

享保十二年　丁未　正月宝

三月朝日夜五半時光物東より西へ流れ花霞の如くなる

○本撰町宗安寺に不動明王像　○角田川本母寺梅若丸七百五十年忌寛恕　三月十五日

より開帳

○書籍穂集成　紀氏彩友山翁八十九才編輯　宝暦年迄加筆する

○五月十二日御人形百蛍卒　号雷光六十二才多田半くゝ別号東洋子と称す

辞世の句　死て生てまたゝく蛍月をあなうらゝ

ぶりを不満して立る墨花を作文山の書あり　詩人雅懐八百里の男あり壮威

あり　明を矢ひゝ　寛延七年七月六日歿孫ら円光寺に葬る　松濤波小路墓あり

○六月上旬より市中所所病疫大流行　常陸坊海道大杉大明神

祈願あり　○大雨雷鳴　○十二月十日表二番町より出火　西丸表二番町

の家数を焼し　○年内に清水御普請あり

○釜屋定林卒　月日未詳　○十月七日牧村内匠頭屋敷に養子

又四郎妻ゝまを代志八刑せらる　ゝまは世人の知る所なり

○十二月十日表二番町より出火　糀町永田町　麹町六丁目虎の門久保

町あゝこの下塚上より表門迄焼亡　糀町うゝ通り

焼亡　同廿四才　法名大雄院殿不葬地

焼亡　○十二月十日御人形志邑佳風卒

享保十三年　戊申

正月五月清水如月卒　七十二才清水宮内卿法印と号す義氏の末裔山田町小伯耆守の孫なり文のわくの細工をよく作る生涯沼名氏を名乗る
載言集に子宮内少輔流し給し老母の養育あり文武ともに似て綱之丞妙
あり一世雅号集にいつる事絶なし宮内卒は八月廿三日卒享年六十九才

○同六月狩野如川周信卒

○正月十九日信濃松代侯の御藩士千曳卒

○正月十六日夜光り物あり○二月十九日信濃光る富山所出の物奇を求て
六十三才久義の孫惣兵衛　○日暮雲濃光る富山所出の物奇を求て
三四長松ち千葉を　○日暮雲濃光る富山所出の物奇を求て

八家を定む井上通憲の序うあり八家　能役者陰　昌琴歌雪　茶時落ノ
遠出夜楽　隅田秋月　利根遠帆
暮荘烟雨　神田老松　なり又当西の
十三家の内ひとり石林家酒の撰あり

○二月十六日猿楽町より出火小川町一ツ橋法門永武郎と一分
町焼　○二月芝光岩山寺焼

○二月廿四日濃州板倉侯軒卒　雅号谷法印なる不義に板倉
忠五の墓も同所にあり

○浅草町麹町元山王永田町猿楽町小川早稲河原原田町辺の家作
芝柔蕈を止る○七月二月連寺院屋村仍民卒　五十九才

○七月吉原仲の町小焼跡をおく　角町中万字屋の名妓小菊といつるもの
享保十一年辛卯三月廿九日死せり今年
三回忌ゆいとり名弔霊をまつるとて仲の町張や扇文楊屋町松屋八幡町
ばるをたづむ始い切子とうろうあそあり一とりとりて玉菊追善祇さうし
あり一とりとりて玉菊追善祇さうし　一の小川破笠の奇巧より在寅ずうくみ
河原原の上より作仮人形をそ引き上る
○八月廿日夜とり九月二日二百年大風雨あり　ていあり浅草
橋和泉橋柳橋柳橋二日の久方流れる二月朝夜五橋中程
二十六間切流る新大橋角の方字二号程切る永代橋八番橋の中
あて古橋抗流る下谷浅草の内後き百八軒場あり小石川
流芝橋も亦小橋流も同白山源も上方の白幡堂る前遠流
門昌平橋の二橋流損ふ川ち仲間多被十一月ふ如る

○十二月廿五日、小川町辺大火の節、新橋辺焼失。

○九月、幽谷師、俗姓義務、名邦達、泉岳寺に葬る。

○十月、巳日、谷日宗寺に鬼子母神像を安置す。日法上人作、孫金作人孫田宗治作。

○江府名社記刊行。荒井志敦編。

享保十四年己酉　九月閏

四月廿七日、国学者、名源光海、名医、号祥寛、内七十一才、青山玉窓寺に葬る。

○二月十六日、飯田町坂上、武家方より出火、金田宗益、山庵表より、田安門外に延焼の所、西南地に滅る。○五月、交趾国の鄭大威、鄭亨、鄭国の商大象、鄭亨、来る。去年六月、長崎に牡牝二匹を渡す。牝は長崎に於て斃る。今年正月、牡一匹を大坂に牽く。五月廿九日、江戸へ牽き、牡は中秋に死す。雌は中秋に死す。この時、京師にて、掘御家の法、弁あまたあり。中に世に書伝せしとかや。

○十一月、廿二日、書家、後藤保考、号彝溪、称清助、芝新堀に住、雲に葬る。

同十五年　庚戌

四月、江戸町火消、十七組を十組に定る。目下の基の数形あり。纏の吹流し止てぞまんを付ること、この時、小組に十七組ありしを、大組小まとめ、十組に定む。

○三月十八日、深見十左衛門、号休徳、九十才、牛込行町、浅草に葬る。

○三月、東醫宝鑑廿五冊刊行。

○巳月、春坂永川、祐今井、益、稼、社法建立あり。廿六日、近辺有

○六月八幡宮破損、ありて、春多七左衛門、を、請て、九月十九日、より

この時、中村三近、編の家の貢、自筆、巻、京に、せり。江戸の俳人、仙宿、白水、山王、広重、礼の時、稲町、より、大家の、作り、物を、ひろ事、この時、のまねび、ありとい、て

○十一月、廿二日、書家、後藤保考、号彝溪、称清助、芝新堀に住、雲に葬る。

○烏丸光栄卿、この時、中村三近、編の家の貢、珍、記、又、編、広重、家、志、などい、広重、今、ひく、家、古の、稲、神、こ、つ、む、り

○江戸町火消、十七組を十組に定る。目下の基の数形あり。纏の吹流し止てぞまんを付ること、この時、小組に十七組ありしを、大組小まとめ、十組に定む。

○三月十八日、深見十左衛門、号休徳、九十才、牛込行町、浅草に葬る。

○三月、東醫宝鑑廿五冊刊行。

○巳月、春坂永川、祐今井、益、稼、社法建立あり。廿六日、近辺有

○六月八幡宮破損、ありて、春多七左衛門、を、請て、九月十九日、より

同月五日の為地内に於て勧化能興行　桟敷金二分より一分二朱　一人分銀二匁つゝなり

○五月金札銀札先年の通り通用御免

○六月十六日庵然軒志賀随翁卒　百八十三才天徳寺中西向院に葬

○八月廿九日大風雨深川三十三間堂吹潰(つぶ)る築地大破ある

○十一月鶉(うべ)のふりといふ病(やまひ)はやる鼻より上黒くなる

○冬より翌年春にいたり麻疹流行　身うちへ白斗出をぬる

○足立郡見沼(みぬま)に新田を開かる　去る戊申年下総国手賀沼を新田に開きし頃、同国飯沼・源右衛門といふ者を撰み命ありて普請奉行と役儀を命じ、見沼の新川に船を通せんことを考へ、かの勤を全せしむ。今年も又足立郡の内にて六所の地をあひ江戸神田川の辺にも舟つきをあひて凡そ沼川運漕の舟は年々流通せり。是を見沼通船と云ふ。子孫弘化二年の頃に至り小山田与清是なり

享保十六年　辛亥

正月八日狩野栄川古信卒　三十六才

○二月十五日昼九時大風中下刻同白銀武家方より出火、辺の三つ下不動堂も焼失、関口水道町改代町辺牛込東榎の社迄、武家組屋敷、牛込市谷辺逢坂上下山伏坂まで類焼、同時麹町六丁目続番町へ飛火、半蔵御門外より山王辺諸侯方屋敷、虎御門幸橋内焼失宮社并久保町芝口通町筋并明神宮前の浜鉄炮洲海辺まで焼る、暮六時鎮る、武家町屋寺社類焼し夥しく焼あり

○五月廿一日宮濱安見晩山卒　名元乃　称文平　麻布善福寺に葬

○七月十二日栄人野田柳翁卒　名久忠　極楽寺　菩提寺に葬

○八月十一日夜より十二日辰八時まで大風十七日夜并九月二日大風雨

○九月十七日狩野永生の憲(のり)信卒　四十才

○十月十三日日蓮上人臣百五十年忌法会あり
○十一月十三日本願寺○十二月十九日僧侶右田弟貞率 弟義八 二本榎
義教を
殺せり

享保十七年　壬子　五月改

正月十二日僧侶矢野独秀率 弟義乃 弟波暮を殺す
○二月十二日光寛寺青松寺より出て新橋を焼同日小石川白山
より出火松平田村侯邸ホ焼る
○三月増上寺の柵門内子聖檜現勧請
○三月廿八日浅草寺辺より出火浅草下谷辺寺社町方共
焼亡 此時浅草火除のため本願寺町福富町等代内町屋を 石上寺並一橋田原平智地を下しおく
○祐田彫祐橋門再建立 町くらより神の紙入れの三分一を見積り金三百両を
収納せ彫祐家町人より寄附をもて建立ス

○浅草寺命院より上及び祐田医師の職業師寄附
○光明地院号同寺ホ寄附 ○天下飢饉疫病行る
○六月十三日鼠疫病流行
金華率 此十五年祐源寺の汐世話居
蓮光寺ホ葬ス文政年中ホ遷ス
○冬流鶯名人栗本光寿率 八十才 祐田ホ居せり鶯の空とのみ沼味を丹誠
より辺世の好ホして今も光寿の流方を
世ホ流ふ
○青〳〵物語成 彫見人及法人編写あり 蔡安
巣鶴の次より世上の風俗を述べる也
○江戸砂子初輯成七巻刊行 巣居山原の編あり 後世和ホいう主男
恒貞親王補正再刻〳〵今以て世ホ行る

同十八年　癸丑

寺浅草寺奥山ホ桜樹を植 ○正月巣鶴林信充月蓂春里流行
ホ拾ひて十二月景の詩あり 十二景ハ 鶴渡蓬島 秋父遠景 隅堤川夕照 梶原村
田家 玉子渓林 平塚落雁 鶴壁秋月
清井夜雨 里婆山秋雪 北浦川帰帆
中里鮑滝 西原晴嵐

○冨士浅間宮御神物と申者俗称ふして冨士登り来二十三度
終に入り年六月十七日山の七八合目にして絶死せり　青山海蔵寺に墓あり
○二月より田内院にて城及源家釈迦如来開帳
○去年より流行病（疫）○七月上旬より疫病天下に沿まる十二月十日日
大流行来絶えり業にて疫神の形を造りて送るとて瓶に
数を多くつれて海辺に到る○凡灌仏付出板をなせる
○七月八日より築土明神宇佐宮開帳八月廿八日まで
○八月六日金影山横谷宗瑞率　本市橋の中　名主宗瑞
○八月十九日富士より夜に入りまて大風雨を潰せり
○川崎宿長寿山観音の霊験石海中より上る
○九月将軍御参詣信濃善光寺の鞍並馬を画る絵を流布す

扨〳〵○江戸名物志云江戸の町人加賀屋長兵衛故自（恵義）を
尋し九蔵院と云て本郷山の傍に百一坪の地をもふ
○十二月流行疫（感冒）病（巴豆）の粥を持て今年疫（感冒）病村長寺に寄りとのくり
○江戸名所図会六十帖の内を見るに云江戸市屋宗助と云ふ商人元祖中興の大火に焼亡
本の焦ひをすてゝ又渡れ流の石垣を修又今年日本橋西川渡
のものを求りて流行病に食よく大分限となり江戸町に住せりこれ五年せる格子を
江戸市屋格子と云宗助五十才計り中て子孫
世を重ね繁盛して百家とりと云云

享保十九年　甲寅

二月廿日江戸浦賀谷村の浜鯨二ツ流寄る五尺　二尺　安房国辺廻船
て賣せ物と云○二月廿五日備前国中葉陵率　二十六才　山谷　瑞泉院本葬
○二月廿一日弘法大師九百年忌　生の云家寺院　法要を設く
○二月廿日紀伊国紀文大尽文右衛門死せり　西福紀文大尽之墓号千山と云　増上寺中　浄土院本墓あり　晩年深川一の色居乃
例に居して終まり

○七月廿五日世上へ毒の降るといひふらして井戸へ蓋をする

○八月十二日官儒宇治巨倉先生卒　七十八才　通称彩助後の義甲賀町住大坂淀侍院東農家の後小藤沢法華寺に葬る

○九月十日御医桑島貞作卒　六十五才　本所法華寺に葬る

○十一月官医望月三英法華寺の七堂伽藍再興を弘む

○十二月本所小法華流速

○大坂屋茂兵衛江戸へ下り見られる義を変第の浮世絵師古小

行する把茶摘八処宣布芝居流行と成る

享保廿年　乙卯　三月改

三月二日淀侍家義士二十二回忌淀侍家の墓所石碑を建る終夕

有縁小石湯撰あり

○三月十九日儒師山田麟洲卒　名弘嗣　孫大佐谷中南仙寺に葬

○二月本石町へ初て人参座を置る町医岩田玄法杉山養元秋

参を制す　同本下浅草見元人参獨参湯を弘む

○角觝人丸山接右衛門長崎出て終　○紙板の名号回向院内宗旨帳

合運　○同所内千住絵彩小野宗悦帳　○東叡山小石川天宮建

○五月七日書家佐々木文山卒　七十七才　浅草法華寺に葬る

○五月晦日儒師奪見変治卒　四十六才　浅草法華寺に葬る

○七月二日黒雲天を覆ひ大風瓦を飛し所々家屋を損ず旋毛

ありといふ○秋深川八幡宮の境内小能師祇空を祇敬夫神宮

て神木多り小祠を建る　吉田家ふ中絶あり一友之ことふ祇空遺ものハ享保十八

○十月麻布宮焼亡○青木崑陽　称文蔵　石人形を彫りて耳鼻口を

○十二月廿二日細井廣澤卒　七十八才　ぐろくか村法名七ツ葉院門人平林
傳益道を弟子多あり　墓伝馬町之烏ノ宮辰巳思菴ニ井親和
男を九皐と文しいふ

此年間記事

同黒川盛隆寄刺金毘羅指現社造営　或記曰社ハ寛永古しいつの
時代再興ありてより信人も
捨しけ之寛政元年八分九百
巳十坪境内等附ありとぞ
多し　○江戸中瓦葺　御免あり
○中野小松樹を栽しめる○深井極本屋伊兵衛百樹の楓を
養ふ○武家ゝ繼上下享保の頃より始るとぞ御図答ふ人元
ゝり　但し裏付上下ハ元の
ゝり　元文ゝ元年ゝ
○神田明神社神事能ハ天和中より連綿ゝ享保廿七年葬
義并道具を収し金庫新燒せしとぞ

用ふ云中古武家ハ飛ハ屋敷と号しゝ古物を
ゆて熱俗事漆塗ありしゆ中ハ人形等元のあるひあり是を祭ふ法ゝ
を費ゆしを金ニ二十四五両を限りとす今の如一年の費ハ也ゝ法ゝ
且供事ありを月々ゝ此の屋敷の外ハ也附家と号し所の移り拾ハ也
屋敷ハ享保六年ハ法行止ありて其後ハ
如ゝ貧ハ也ゝて踊屋の四面ハ二ゝ
ゝ元ゝ三味せんを深笠のちりめん紋絞の裏つけ
踊る節ハ殺ハ度拍子後の内ゆり拍子ハ
ゆ法ハ法ゝ扇獅子ゝ法ゆをゆむ
風俗ありとて天保中絶ゝを教打板田辛立所のそゝ
○此時代書家　巽林行　細井廣澤　森井清水　佐東湖　佐ゝ木文山
号を元沢ゆ　○芝木彈守法号唐師号英菴と云初ハて宋
元の体を刻意ゝ詩他ハ妙を將ゝ後徂徠及ひ南郭ハ学んて詩
風を変法ゝ生集を沢渡集ゝ沢ハ
○享保中荷田春満東都ハ国学を教授ゝ元ゝ中ゝ
○此法流第ゝ境内ハ於て靈金ゝ辻ゝ義ハ歌云を安く

人の笑をとる為のみにもいふ仏師宗之の事なるべし
志道軒いはの昊金を出す似せるものありといふ虚説なるべし
○時計茶昊なとゝ流る○江戸中毒蛇流行なるに依て
ありて断て止さり○浮世絵師　奥村文角改名　芳月　名村常吉
仙花堂　名居清信　同清信　迎蔵助五郎清吉　冨川吟雪房信等
行る○浮世絵宮古絵師　後藤享保の末京都より来り一時に
行はる　この時享保後藤の凡信を出す似せ繁に文金風とそろげの髪を要点元結なく巻
髪にて賢の毛を下ろし上へ引き上月代の際まで巻込て結ひ夜叉と対人
の羽織を着し長き紙を出す小さく畳まひ下駄の歯
なる指ふりて傾の様にさし出す元禄時代の凡信也
○半夏半夏　半夏半夏六路流行歌を浮ひ後絵師の左来学
一家を成て板木彫製して板木深きこと
○松浦氏五郎坂田氏を江戸に小金江戸に小唄流行
○大道芸　辻小うた流行　中村治兵衛小うた流行
小うたの声曲新製なり

○琴お撲流行　拵女郎菊おくやこと
○栖原角兵衛という者　帳場を多く切て早く行る
久しうして止む　大江戸表　秋不知
ばかりなる者居もあり○小川入谷山稲荷社中央享保乃
しを遊行上人行化の時上人ふたゝび勅請せりとあり
○大久保七面文列西法寺　法華宗むし　接の名所なりて表毎年歳
此所ふ拵親せり表時山と号するもこの辺なるべし享保の頃来
接も殘りしうど遊観の人ハ稀なりし中程ハ居りて
○連雀町八節遠信門の内須田町の続ふ上一ら組所廣協とありて
今の西引けさるハ享保のもしあるべし
○享保の末横山町の伝外屋敷を清水行徳村地先字ふ三ふ町と

号所ゝ而小隆濱を寛政年間に今加賀新田と云所あり又新田多く繁茂
とゝ小の家さゝ隆濱を後年情新田といふ
○世初武相の界境坂下夜毎小鳴の音あり笛鼓又人の呼声
ゆゝて井小老人の声一人あり辺土江戸とゝも変小人多〳〵一方十
ゐ小家〳〵とて賀多書小ゝ止大江戸裏秋月お

元文元年　丙辰　五月七日改元

正月仁風一賢上梓公布あり○猿屋令宿板
○正月九日茶人庁屋九内率号下臣三隅如茶七小茶人
○京霊生壮光源寺濱子沛新田向院小子小家
○同真如堂本号湯し小社地小ゝ家
引智始るとゝふ文金銀○六月廿日園林行率勅海と号出を居ゝ隆寺ちゝ宗安ち小茶人

○七月下旬ゝり東の方小赤紀昇あり表五月ゝ
○八月品川小善切大統寺小長道子の筆南海補陀山法海寺立ゝ
親世者像を写ゝて得を立る素人狩伯喬写ゝ加茂氏造立
○八月晦日古筆了仲率八十一才筆除江ち小茶人
○十月小梅村小子幾を鑄させる背文小の字あり今年猿江子ゝ隆濱あり
○十二月江戸大雷合運小○十二月百ゝ大頻ひ多ゝ死人
○武蔵壮地々ゝ考梓行弱毛原上芝生村百姓田沢孫右衛門義章作一ゝとの日死梓行釈法橋編

同　二年　丁巳　十一月国

二月十六日ゝり浅草寺観世者写仏
○三月廿九日国自西動る時長谷寺の隆能壮壇初めあり
○正月廿五日西時小山の辺ゝり流ゝ小ゝり小稲田町多りを

巻き人家ホ損セ○五月二日下谷八幡町より矢火出流士町ヲ上野廣小路池の端ホ東叡山慈眼堂ヲ亦坂本合羽箕の猶まで焼る○七月十九日書家沈永道雲率　名英長象則を長く沈陸奥ヲ称す

○八月川に魚死ス沈魚ホ羅り〳〵式所より再建の彩奉加をもとむ男女老稚日毎ホ募縁の事をうゝひ紙をなゝし市中を辻行して施物を募る九月ホ到て信止せゝる事ヲ告ケ生この奉加の事を撰まるの文あり則生生の文集ホ載せり　文面白けれとも略れハ死さだ

○花名ある少く桜樹を載しめゝる同所一輝立帰風卿文を撰ス　合羽ヲ伯臓

宵闇傍観の建ゝる西之書ホし川の名を絶ス　○八月廿日信濃国雲英率　称ス左右雲ヲ　巴食戒行ヲ本業

○飛戸又深川小名ホ木川ホて鋳造あり小名ホ木川ホて鋳る所の名ハ

表の鍋或ハ背面ホ川の字あり

○十月十日夜九時星月を貫く　東ヨリ月出ホ入り南方ホ沈る

○十一月七日世上一同ホ懼の事ヲ説る物吹出し火事の如し世俗呼気

ホして筆せし桜花咲　○閏十一月十二日二世英一蝶率　通称長八深川陽樹ヲ称ス

○十二月十日水府廣信安樓滝率　号老牛庵十五十一才　ヲ舞水生生の門人

○薩摩芋洪こゝろとり追く弘まる宝暦ホ到りて上総ホ徳生落

ホくあゝく倣る

元文二年　戊午

二月彼日夜五時ホ光物飛ス

○二月廿九日儒師阪内東溪率　名隆興　陸奥

率蔵ヲ称ス

○巳月廿七日書家園秀行率　林竹の門名義号孫橋率

陸奥ヲ丁宗安ヲ称ス

○五月廿五日儒師八ヶ丈華率　名後字子重

下総常陸ヲ称ス

○五月廿五日賀茂名号居建　婆陸奥ヲ出羽水

○五月十日儒師徳力恭軒卒　号有隣　日暮里　南泉寺に葬る　○冥東山僧

○七月廿七日俳人源川淵十卒　六十余才一号老亀　山谷宗林寺に葬

○洞房源雲梓行　彦司楊　冨桃

元文四年　己未

今年浅草寺久保田の桜の折節花多く山の桜を植り始る

打枝の色番見を設ふあすう山花のところの茶も知る也

○牛込前栄寺境内に梅現発す　○回向院にて二月墓年号寛保

○幸所押上にて鉄砲を鋳又年壮剣因にて鋳鉄あり

○三月廿日神田明神下より出火柳原まで焼亡

○十月世話人源雲梅庵を修る　○茶毘林底に付

下谷の名僧茶あり　○十月廿三日儒師家勿軒卒　名洪漢　大隅出厩島に葬る

○十二月晦日日暮里善福寺にて自殺落先生　就て葬式乃

真淵を葬り渕の招ひにて耳目を驚せり同日浅草寺にて終る

しかし見えたり墳墓も同寺にあり　自墮落先生通称山崎三郎右衛門と云

の招号あり性質気随にして士農を嫌へ為に水泡を好み俳諧をなく　不思議庵　不量軒　捨生翁　確蓮房に

して其門に於て　風俗文集二冊　不思庵別記二冊刊行せり

同五年　庚申　七月室

回向院にて伝州若光寺地蔵開帳

○伊勢屋庵の所の法施沼戸にて

慶卿疫病に罹りて卒　十七才　幼名　称章根岸

○七月朔日書家藤清水海卒　名維章　若竹に葬る

○俳人清水紹波卒　二十六才　流派　称会る小林

○九月一日浅草元祖宮古路

歌撰死　○人るといふ藝能稽業を変へて歌撰死　室七月

行る○十月廿六日東湖徳川師家　小石川二百坪余昭院ホ葬を能出の故メ元あり

世年間記事

小金井村（こがねむら）多摩郡　小和田吉野常州桜川の桜の苗を栽添る（始八寛永のむし）

植させあひしーあるとしーゞ処ニ字の

ほまても狩植しめられしといふ　○武蔵志料ホ云玲々森八幡宮境内

ある所の烏石麻布雑色町（ざつしき）の内大門と云所ホ新在て寄ると

呼ぶ今も面の名を寄ると唱ふ元文の頃烏石（うせきろん）蔓辰巳の名を世ホ

知らせんと世ホを吟の森ホ移し埋めしを元と限りあり書家の虚

名を好む如きかとしるべし

○平林惇信（ひらばやしあつのぶ）俗称庄五郎　文化遺産清右衛門と称て宮町の帳面に清右衛門

書を能くせ大福帳の上書して賃事貴ふかりしかば清右衛門を

きらひ次次沼中商ひ大方彼ら上書を求しに惇信ら

細井廣沢ら門下入能書の名ありあり

○石碑（いしぶみ）の深撰拓本ある市松形とりホ寄て鎌倉彫沼田川市松

好こそ品しるなり○鶴ヶ岡の花ひんさくあり

寛保元年　辛酉　二月二日改元

正月廿日書家ホ清友ホ支没辰年　七十一才号友斎　車坂大谷ホ葬也

○二月九日後桜町天十二代桃園ホ崩年　五十四才

を葬る　むかし後寛必二年の例ホ倣ふ　○二月吉原仲の町桜

年堂再建　世ハ尚之

ホ　○永代ホ橋会橋文屋帳○七月十七日傷師佐藤周助年　六十木屋ホ

葬　○七月廿日新井宜弼年　白石男之　○十二月廿五日捨像流剣術祖

ホ木ホ墓つ年　汐留ホ林ホ墓あり舞世の寄附ありて

弗佛ありてまりて行ひ世ん為ありなりとも成るのホ

同　二年　壬戌

正月下旬より東方へ曉七時ばかり雷鳴あり　長サ一尺五寸程

○六月六日御人早舟巴人卒　六十六才

○七月廿八日より為隣猪八月朔日益八半時より大風雨夜毎へ止事なし　を郊大水漲り　なお新深川人家を浸し大川通り多勢列へ〜なお必橋ハ出舞沖まで杭を流し永代橋新大橋損隅田川土手切る　菖蒲へ多押入千住土手切る　五日又利根川堤切る　沒家多ありさ惜り　溺死多〜　官府より八月朔日を始め三日ハ小屋を建て食物を与る　八日九日又大風ありて多損り下旬ハ出て引く　実に前代未聞なり　御普請あり　翌年癸丑五月刀称上流以来

佐治芝成の碑文　後元禄己巳を撰す

○去ル巳橋南ハ月より活普請中ハ洪水流〜　ハ多ありこの年ハ及ひ翌寅ハ元甲子五月元のまく活普請成る

○十一月故実者本邑の敷率　芝泉寺ハ本業ハ

寛保二年　癸亥　ハ月ハ

二月朔日より上野清水観世音　堂久ちかく　開帳　○二月九日より浅草乳山聖天宮開帳　○同日より護国寺内観世音開帳

○三月十五日より芝切町菜所境内ハ井の所弁才天開帳

此比友人者蘇子より開帳記より一冊子を借り写　寛保二年より天明八年迄の開帳悉く集記せり　なお後ハ漏あり　月ハ人いふる事あり

○花を山の花を押花といふのみて実稽上人より

冷泉家ハ村々　折枝のむりも思へあまり山時の花の基の色一番ナリ　時風ハ

○ハ月朔日より清水観音ハ福ありて京清水円光院観世音　円光院ハ本寺

寄帳為後世之矣天寄帳○同日より子授現同稲荷寄帳

○同日より日蓮宗淨光寺人形祈寄帳

○同日より六所神社寄帳　汐基井ゑ子　三年辰年表

○二月六日医師平月百里寄帳　号雷山又号居士七十九才漢学者松院子

あり一人八郷師高弟百里　墓は和歌を能せり一人之同郷小石川百里二人

雷山と号し浪速へ帰る

○閏二月朔日より湯島社内にて大坂天満宮

遷座之子寄帳○同日より市谷八幡宮にて野州東宮雅山医王

寺薬師如来寄帳○同日より池の端にて比叡山坂本西教

寺祖師寄帳○六月二日麻布形乾山寄帳　八十三才号深省孫狩三郎法橋

光徹の兄にて本とこれ八郎と陶器に

名あり茶碗をよくせり　坂本浅草寺に葬る

○閏二月勅進比丘尼中宿を作る　寛保元年の頃ある

桜田辺の武士と懇ゆ情死せり者ゆえ　比丘尼八度町に

十帖ほどの宿田ゆ有るを上と　ゆ稲田小岩井町幸所あさけを下と民宿八郎右衛門

を上と　八度町を中と　を廃絶第四の頃なり　比丘尼中宿

絶加賀笠あり　正徳二年より　微ほど廃絶　英国海の頃中ゆ有る上の比丘尼八ゑびく尼二人

つまる今堅固を

なるべしと云く　○七月朔日より陸奥流行町流行神寄帳

○同日より阪田町世継稲荷寄帳

○同日より市谷八幡宮にて三月風雨寺日輪院不動寄帳

○十一月上旬より夜く弥陀堂の方ゆ現れ　稲荷

ゆ

世年間紀事

御徒宮通江戸ゆ世六人あり駕にて弥陀堂にて常仏とゆふ

人の輝ゆて千くの秋くゆ御書あり今時宮通と号し名歌百人

ありやとるへうし世通の裏さる気狂堅あらら知し

○富士の地下山猫くあつけ一家屋安不くゆふあり

武江年表卷之四　畢

編者　斎藤市左衛門幸成

武江年表後編

從延享元甲子年
至嘉永元戊申年　四冊近刻

嘉永二年己酉十月刻

發行書林

大坂心齋橋通博労町　河内屋茂兵衛

江戸日本橋通二丁目　須原屋茂兵衛

同　淺草茅町二丁目　須原屋伊八

發行

書林

京都三條通井屋町　出雲寺文次郎
大阪心齋橋筋北久太郎町　河内屋喜兵衛
同心齋橋筋安堂寺町　秋田屋太右衛門
江戸芝神明前　岡田屋嘉七
同日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
同横山町三丁目　和泉屋金右衛門
同本石町十軒店　英屋大助
同神田旅籠町二丁目　紙屋徳八
同大傳馬町二丁目　丁子屋平兵衛
同日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同日本橋通二丁目　須原屋新兵衛
同日本橋通四丁目　須原屋佐助
同神田通新石町　須原屋源助
同淺草茅町二丁目　須原屋伊八